

アンコール遺跡・タニ窯跡群A6号窯 発掘調査概報

経緯 アンコール文化遺産保護共同研究の第3フェイズでは、1995年に発見されて、調査研究と盗難防止の施策実施が緊急の課題となっていたタニ窯跡群を事業対象とし、発掘から整備への一連の手法を現地関係者と共同研究することとした。事業は平成11年度から13年度の3年間とし、平成11年度は8月と2月の2回、発掘調査を行った。

遺構 焼成部のみを検出しており、床面も全体を清掃していない状態にとどめている。ただし調査区西側で、床面が段をもって落ちることを確認しているため、そこから下が燃焼部になると思われる。窯体の上部は既に流失していて、煙道部は残っていない。現状で幅約2.8m、長さ約5m分を検出した。

天井支えの支柱は、窯体中軸線上で2本を確認し、心々で約1.2mの間隔があり、支柱が等間隔に設置されているとすれば、窯体の残存範囲内でさらに2本確認される可能性が大きい。

窯の壁面の内側には粘土が貼られているが、スサが使われている痕跡は見いだせていない。貼り壁は、5～10cmぐらいの大きさのブロックに分解する傾向があり、これは壁を貼る際に塗り付けられた粘土の単位かもしれない。また、壁は何度も補修されているようで、多いところでは断面で3～4面の壁が認められた。

遺物 今回の発掘で出土した遺物は、大きく分けて灰釉陶器・無釉炆器・瓦の3種である。全体の印象では無釉炆器が圧倒的多数を占める。

灰釉陶器

丸型合子(図1) 半球形の身と蓋が組み合う合子。大小2種がある。

筒型合子(図2-5) 扁平な蓋に筒型の身が組み合う。大小の2種がある。蓋頂部に扁平な宝珠鈕や輪軸鈕を作り、そのまわりに2～3重の突帯を巡らすA種と、頂部は低平で鈕のない形となるB種の2種がある。

小型盤口瓶(図6) クレントタイプと呼ばれる、初期クメール陶器の灰釉に特徴的と考えられてきた器形である。大小2種がある。高台外面には丸形合子同様の線刻の入る個体が多い。

丸形小壺 後代の黒褐釉扁平壺の先駆けとなるような球形胴の小型壺が確認される。

無釉炆器

鉢(図18-20) 口縁端部に斜め下方に広がる縁帯を有する大型の鉢。縁帯は3～4条の突帯で飾る。体部の最大径は口縁直下であり、底部に向かって直線的にすぼまる。大小4種に細分される。底部に直径2～3cmの穿孔がある個体がある。同じ大きさの鉢同士を、正位で積み重ねた重ね焼きの痕跡が観察される

四耳壺(図10-13) 胴部の最大径が上にあり、肩の張る形態をなす。口縁直下から四耳のとりつく部分にかけて、突帯と刺突文で飾る個体が多い。四耳は形骸化し、紐を通す小孔はない。口縁部の形態に多くのバリエーションがある。

広口壺(図7-9) 頸部から口縁部にかけて大きく外反し、口縁端部には幅の広い縁帯が付く。

瓦

軒瓦(図14-15) 今回調査し得たのは3点の破片であるが、いずれも文様は異なり、3点とも焼成が異なる。文様は型作りのようであるが、いずれの型も摩滅が著しく珠文などの崩れが激しい。

丸瓦(図16) 長さ24.8cm、広端幅(推定)14.5cm、広端高7.1cm、狭端幅(推定)11.8cm、狭端高5.9cmを計る。

平瓦 当該窯出土品には全形の知られる資料がない。A1号窯からの表採品では、全長19.8cm+、狭端幅14.0cm、狭端高3.1cmを計る。

棟装飾(図17) 高さ17.8cm、最大径8.1cm。

まとめ 今回の調査はカンボディアにおける初めての本格的な窯跡調査である。平成12年度には焚口・燃焼室を含む全体構成を明らかにし、平成13年度に遺跡整備と報告書刊行を目指している。

無釉炆器に分類した中には様々な焼成が見られる。軟質で表面が赤褐色に焼ける土師器質、須恵器のような暗灰色を呈する須恵器質、器表は暗赤褐色から暗黄褐色に焼け、堅緻な焼成となる炆器質、黒褐釉をかけた個体と見まがうような器表が釉化した個体もある。

(西村 康・杉山 洋)

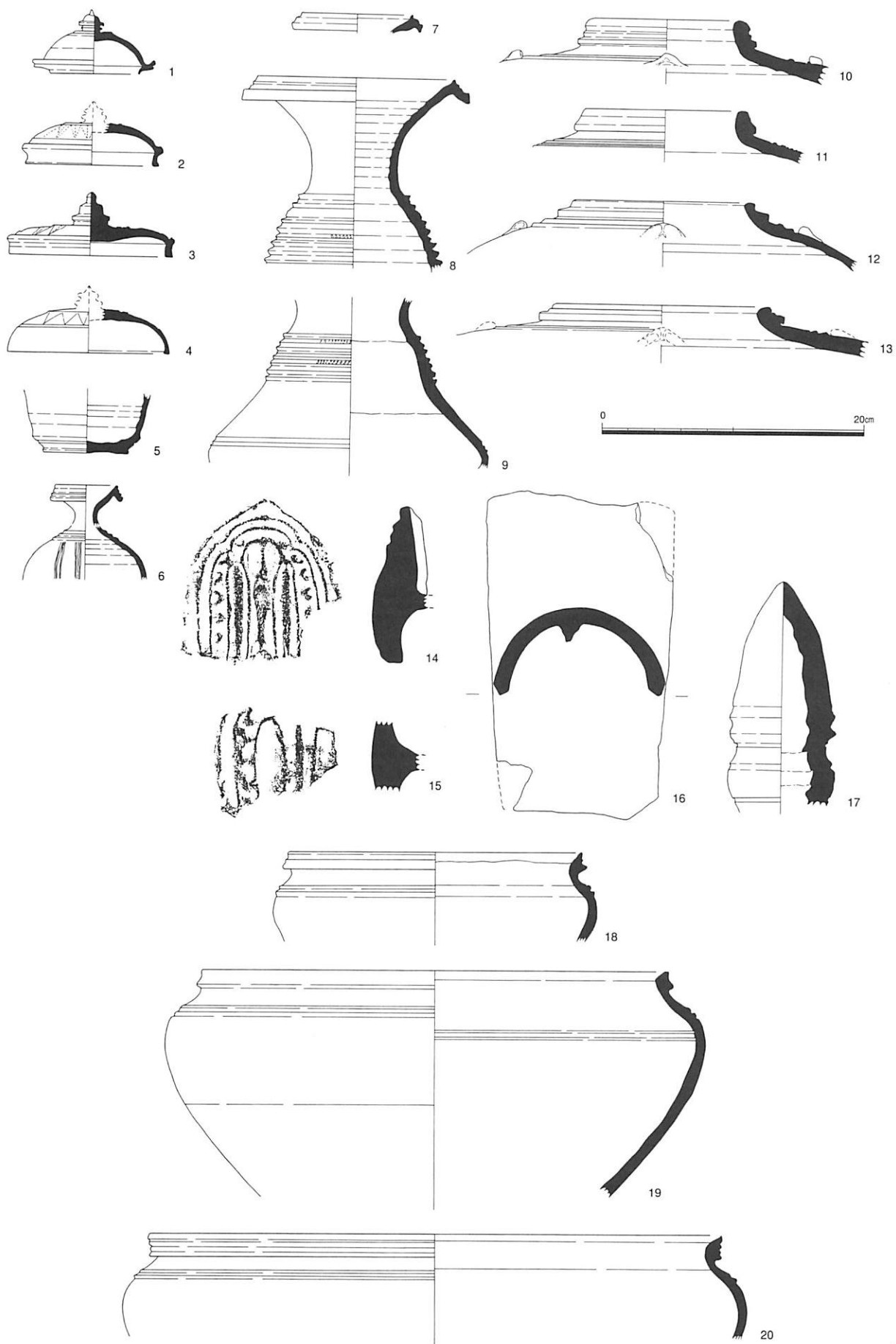


図 タニ窯跡群A6号窯出土遺物